

2.1 パセリー

地域慣行基準

【化学肥料】

区分	窒素成分量 【kg/10a】	備考
県下全域	35	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

(1) 特徴及び吸収特性

パセリーは強健で栽培は比較的容易だが高い商品性を求められ、肥培管理とかん水を十分に行う必要がある。

葉色が濃く光沢があつて揃いがよい葉を生産するには肥切れを起こさず適湿を保つことが必要のためパセリー栽培は多肥となる傾向がある。窒素過剰は軟腐病の発病を助長し収量、品質を低下させる。草勢の調整は肥効だけで行うのではなく収穫の強弱やかん水のタイミングも重要である。

パセリーの養分吸収量は収穫による収容が長く続いたため葉菜類の中でも多い。パセリーが必要とする時期に、必要とするだけの養分を過剰とならないよう安定的に供給し続けることが肥培管理のポイントとなる。そのためにはパセリー栽培用に設計された肥料を用いるほか、緩効性肥料として有機物を活用し、肥料、堆肥、地力等からバランスよく養分が供給されるように心がける。

パセリーは直根性のため作土が深く透水性の良い土壌が栽培に適している。このため、深耕や有機物施用の効果も現れやすい。土壌に対する適応性は比較的広く好適土壌pHは、6.0～6.5である。土壌pHが低い場合はカルシウム質資材を用いて矯正する。